

については、両氏の研究成果を待ちたい。ここでは、前回も素材に挙げた、長野仁、高松茂光両氏の発掘による多賀法印流文献を再び取り上げ、流派形成のダイナミズムについて考えてみよう。

多賀法印流は、伊勢神宮に繋がる元伊勢の神社として古くから近江に勢力を誇った多賀大明神を拠点とする打鍼術の流派であった。この流派が「邪正一如」の奥義を掲げたのは、担い手が比叡山の天台僧であったことと、直接の関係がある。「邪正一如」は医学概念である前から、「煩惱即菩提、生死即涅槃、善惡不二」と並ぶ天台本覚思想のキャッチフレーズだった。だからといって、多賀法印流を単に仏教医学とみなすことはできない。

実邪漏らさず正に成さば万病治する

二〇〇四年の多賀大社フォーラムで入手した和方鍼灸友の会編『多賀法印流医書集成一 印流医術書類（北里研究所東洋医学総合研究所原本所蔵）』を概観すると、喜怒思憂恐驚の七情が根本原因となつて気が滞集し病むのだから、七情を離れなくてはならない、仏陀や聖人は七情を離れていたので、病むことがなかったという心因重視の病理観が印象的である。この仏教思想に拠る心因的病理観と衆生救済の誓願、人を殺す狩人や薬商人に墮した凡俗の医師への憤り、更に「山川草木悉皆成仏」の本覚思想に裏打ちされたいのちへの賛歌の格調高い文章表現が、多賀法印流文献の医学にとどまらない価値である。現在もなお、これに匹敵する力強い生命感が脈打つ鍼灸書はそう多くないだろう。

本文献の生理、病理、治療の理論を構成しているのは、外邪、傷寒、中風、三焦、陰陽、補瀉、太過不及、邪氣、病証、七情など、当時定着していた金元明系医学の概念装置である。鍼の金が水を生じ、邪氣の火を鎮めるという治効理論は五行説である。診断法の一つとして採用されている脈診は、浮沈遲數太細、季節に応じる脈、弦、洪、堅、洪などの七十二脈等、中国歴代の脈論を踏襲している。すなわち、多賀法印流も広い意味では曲直瀬道三が切り開いたとされる、戦国末期以降の日本化された金元明医学の系譜に属している。しかし、ここには、仏教による魂の救済法を基盤に、中国医学の論理構成や天人合一観を日本の生命観・自然治療力観と折衷し、湯液と打鍼と灸による治療術を創造しようとする総合医学形成への意欲がみられる。打鍼術の起源を彷彿させる仏教由来（？）の虫の理論が出てくるのも興味深い。

前回、多賀法印流について書いた時、わたしは多賀法印流の「邪正一如」を、生命の混沌を注視し、邪氣という概念を立てること自体を否定する、「一如」原理主義であるかのように思っていた。今回読み直して、それが誤解であることが分かった。多賀法印流文献は、邪氣を捨てていない。むしろ、それは最重要の概念の一つである。

「動氣片よりて隣の動氣へ加勢するとき、重なりたる所の動氣を高ぶるを邪氣と云うなり。或いは、氣散して減り氣力弱きゆえ順らずして滞り、或いは思氣を集めて滞るを邪氣と云うなり」（『医雑集（下）四邪氣』）

では、この邪氣を瀉すべきか、散らすべきか、という時に、「邪氣を散ずる事、大いなる錯（あやまり）なり。邪を正にするを療治というなり」と、治療論の観点から「邪正一如」の理念が宣言されるのである。「（邪を）発散して当分治すること安し。のち、大いに災い出で、悪病生ず。この病を發散して治せんとする人は、病人の道具を盗み取り、或は首を切るに同じ大罪至極なり」「邪氣は元來、動氣にして神なり。これを散ぜんと思わば（病人の）首を切る。実邪漏らさず留めて正に成さば万病治するなり。

元氣正しければ医せずとも病自ずから治す

ところで、仏教的な「邪正一如」とはどういう思想だったのか。それは実は、「この世には、善人だけがいて、本来、邪悪な悪人などいない」という原理ではなかった。もし、そう考えていたら、戦国の弱肉強食の世を生き延びることは困難だったろう。「悪人は現実にいる。しかし、元々は善人であり、それが悪の道に踏み込んだのだから、排除したり撲滅したりするのでなく、善人に転化すべきだ。そうしなければ、悪という形で噴出して生命エネルギーが枯渇し、世の中が甦る活力を喪失してしまう。大悪人が回心したときこそ、大善人となる」。この仏教思想を、そのまま医療思想に移し入れたのが、多賀法印流なのである。

論理立ての背景に透けて見えるのは、やはり他流派との弁証法的な対峙関係である。分岐点は、邪を瀉すか瀉さないかであった。金元明系医学の鍼灸流派はもとより、その影響を受けた打鍼の他流派も、邪正を二元論的に捉え、虚実補瀉の論理から正気を補して邪気を瀉していた。邪気を散じ過ぎて、患者の生命力そのものを減退させていた。技術論に走り過ぎて、患者のいのちが向かう方向を信じていない。多賀法印流にはそう見えた。多賀法印流も虚実補瀉を言うし、「邪気を散じる」と表現する箇所もあるので、曰く言いがたい矛盾をはらむのだが、ともかく、強調しているのは、邪気は神気そのものだから、それを奪うと患者を殺すぞ、という治療心得である。もう一つの分岐点は、「察証弁治」であった。

「万病の異名あるといえども、過不及の二つなり。過不及もまた不二なり。不及も太過も不及の正、困(つか)れ、水減りたるをいう。しかるに、万病に異なる証を付け医する故に正(気)、困れて気減り、重病と成す。元来、氣、所々滯集するを病元とす。然る間、集まりたる気を散じ、滯りたる気を順巡さすれば、病自ずから治す。氣血順巡すること、正氣足らずしては叶わず。元気を補し丈夫にすれば順巡するなり。これ医法中の肝要なり」(「一格正記・邪正一如」)

道三流の「察証弁治」は、病態観察を治療法に結びつける画期的な概念であった。その影響を受けつつ、脈や腹、舌などを診て証を立てる諸々の流派が活動していたのだらう。しかし、その技法はいまやマニュアル化、形式化して効力は衰え、害をもたらしているように多賀法印流には見えた。証を察し、証によって別々の方を立てる医師たちは、患者を病名や証候名で部分化し、病や症状という表現を通して甦る生命の輝き、自ら治るといいういのちの根源的、全体的な働きを見ずに、部分的な治す技術を施し、正気を疲れさせ元気を減らし重病に追い込んでいく。いのちの根源を見よ。生命も病も別のものではなく、病を通して自ずから治る元気の働きがある。それが「人と天地と同根」の意味であり、如來の本意である。「医(薬)・鍼・灸ともに実に病を瀉し治するに非ず。元氣正しければ医せずとも病自ずから治す。傳燈いわく、我かつて病を治す事を知らずとなり。またいわく、病を治せんと思わば(病人の)首を切るべし。命は病、病は命となり」(「一格正記・邪正一如」)

全体に近づく方便としての陰陽、五行

人の心身は天地宇宙に生かされており、天地宇宙の構造と心身の構造は一体である。天地宇宙が病めば人も病む。人は全身も病むし、部分も病む。この複雑な構造を把握するのに、古代中国では、宇宙の

全体をひとまず陰陽や五行に分割し、分割した二つないし五つの関係を再構成して全体を近似的にシミュレーションする方法を取った。そこから、経脈論が生まれ陰陽虚実を診て補瀉をする医学も生まれた。裏返していえば、古代中国人は、陰陽、五行、経脈、経穴で分割された宇宙やひとの身体の向こうに、分割し切れない、言語化されない全体性があることを理解していた。陰陽、五行、経脈、経穴の分割は、あくまでも全体に近づくための方便であり、フィクションである。老子はそれを有の根底にはタオというあだ名の「無」があると表現したし、荘子は無始無終の「天地の一気」を強調した。宋代以降の中国人は、易の哲学を踏襲し、この名付けられない全体性を「太極」と呼んで意識しようとした。

「察証弁治」を唱えて、金元明医学を簡明に記述し中世末の日本に導入した曲直瀬道三には、陰陽、五行の背後の、言語をすり抜ける宇宙の全体性が見えていたことだろう。禅の教養も、キリシタン神学への関心もあり、魂の救済への願いを生涯持ち続けた道三であった。だが、陰陽虚実補瀉の医学を単なる治療技術としか理解できなかったその後の凡庸な医師たちは、全体に接近するための方便としての陰陽、五行、虚実補瀉を、実体と取り違え、定型的な治療に墮していたのかもしれない。多賀法印流の、「邪正一如」「いのちの根源を見よ」という気迫のこもった断言は、批判の対象となった流派にとっても、再び、いのちのダイナミズムに向き合う契機になったはずである。

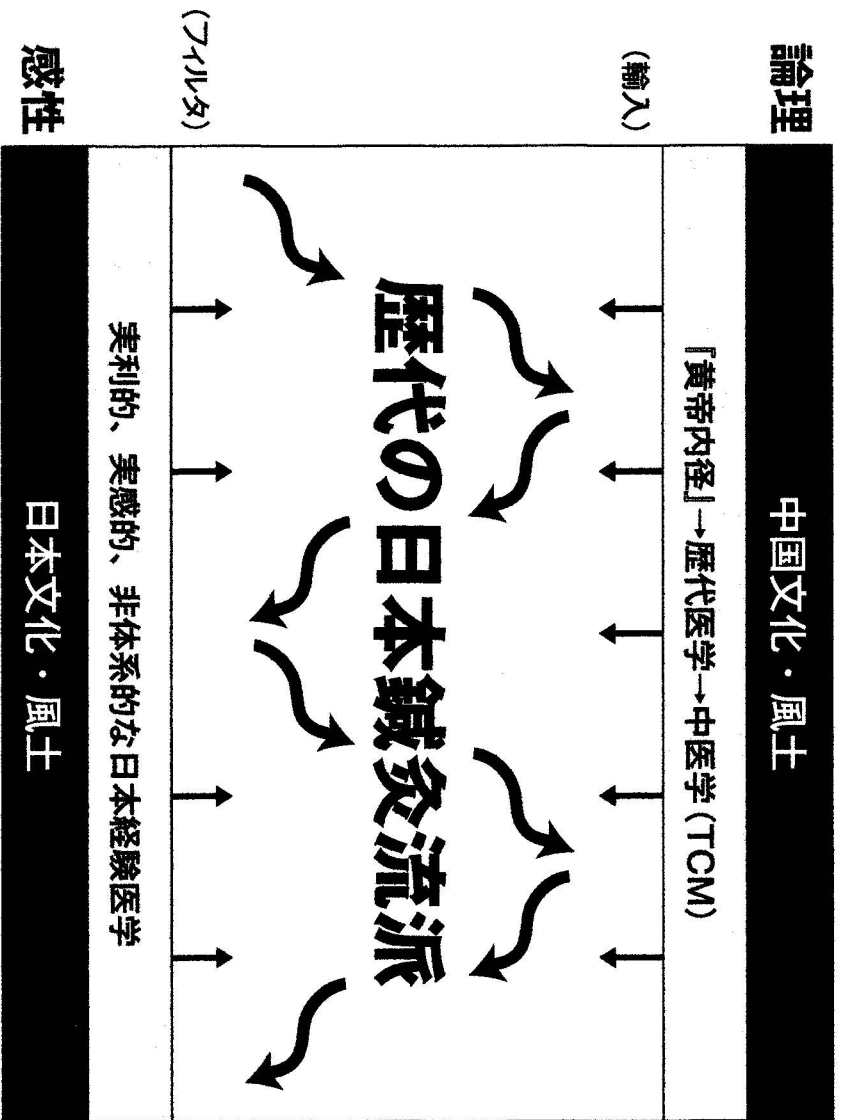
「一」の概念で宇宙の全体性を象徴させる思想は、中国のものである。老子は「道（タオ）は一を生ず」と宣言し、荘子も一切の存在の無差別を「一气」から説いた。禅は黙って指を一本立て、宇宙と自己の一体性を喝破した。この「一」の思想は、あらゆる存在はカミであり、善も悪もエネルギーにおいて一体だという生命自然主義や、複雑な構造的理論よりも直感や実感を好み、物事のシンプルで心情的な理解を得意とする日本人の「古層」意識と親和性があった。もとは中国密教の「一」の思

想である「邪正一如」も、比叡山天台宗によって練り上げられ、凡夫はそのままで仏陀であるというインド仏教からは異端というしかない本覚思想を生む。複雑な仏教思想体系が日本の「古層」の力によってシンプル化され、生も死も、命も病も一つであるという端的ないのちの表現となったのである。

「古層」のいのちの感覚の噴出

多賀法印流は、なんとといっても、古代、中世で総合学術の誉れ高い天台仏教僧の流派である。「人間の苦悩は、病苦も含めて、空を覚れば雲散霧消する。しかも凡夫は既に覚った存在であり、いのちは一瞬たりとも輝きを失ってはいない。この生命の輝きこそが真実であって、陰陽も虚実も補瀉も医・鍼・灸の治療も、すべては仮の方便（フィクション）である。だが、その方便こそ真実への入り口である」。これが、長野氏や高松茂光氏らが発掘するまで「忘れられていた」日本鍼灸のミッシングリンク、多賀法印流の、今日に引き継がれるべき骨太な医療論であり生命論である。

多賀法印流が目指したのは仏教の救済観に拠る総合医学であり、金元明医学の精緻に組み立てられた概念装置を水脈としつつ、同時に、金元明系医学の（彼らの目から見た）空理空論を撃ち、いのちの営みの根源に戻るために、「過不及不」「邪正一如」などのシンプルで率直な理念を唱えた。そこに日本文化史に流れる、外来文化を取り込み折衷し総合化する方向性と実感、実用を重視するシンプルさとの思想的な緊張関係が読み取れるだろう。「邪正一如」の標語それ自体は天台密教僧しか打ち出せないが、それが体現し表現している日本的な気一元論、生命の根源としての一気論、元気論は、多賀法印流のオリジナルでもなければ、創唱でもなかったのである。



【百腹図説】(一六〇二)は、曲直瀬道三が著した『五十腹図説』を二代目道三(玄朔)が増補改訂したとされる腹診書である。その序文には、「胃を以て陽と為し、腎を以て陰と為す。是れ先天の氣・後天の氣を謂ふなり。然り而して之を診するの法は、腹候にあり。故に腹は生あるの本、百病此に根ざす」とある。^⑧ 廖育群は、それを、「後天の氣にしろ、先天の氣にしろ、『而して一元氣なり、太極なり』という究極的な認識」を説明していると解釈し、初期腹診書の『五雲子腹診法』には、「天ノ一元ノ氣」とあると報告している。^⑨

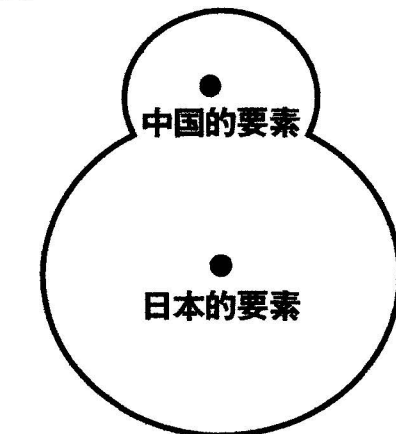
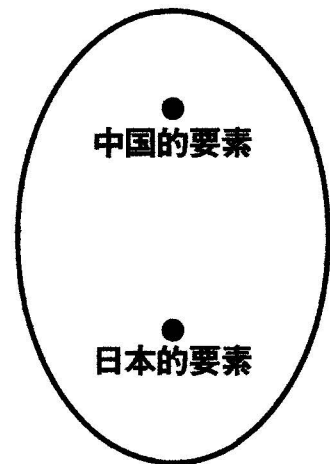
また、石田秀実氏によれば、道三の系譜を継ぐ、江戸初期の医師、饗庭東庵(一六二二～一六七三)たちは、十二経脈について、「十二経ハ一貫(つらぬ)キノ者也、名ハ異ナレドモ、実ハ一源水也」と述べているという。石田は、「この後に続くいわゆる『古方』的な医家の主張を、江戸のはじめの時期に、すっきり先取りしていたもの、といつてよい」と理解する。^⑩ わたしに言わせれば、饗庭東庵らの学説は、古方派の先取りというにとどまらない。後藤良山(一六五九～一七三三)の「一氣留滯説や吉益東洞(一七〇二～一七七三)の万病一毒説自体が、江戸中期に降って湧いた理論というよりは、江戸初期から室町へ、あるいは鎌倉、平安へ、さらに古代へとさかのぼる日本の生命感覚の江戸中期における表

⑧ 大塚敬節著「近世前期の医学」(日本思想大系 近世科学思想下) 岩波書店

⑨ 廖育群著「初期腹診書の性格」(歴史の中の病と医学) 思文閣出版

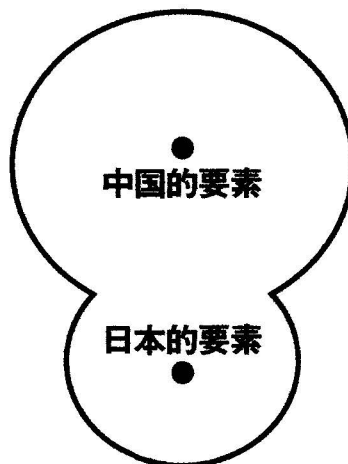
⑩ 石田秀実著「劉医方という誤解 江戸前期医学史をとらえるための一視点」(歴史の中の病と医学) 思文閣出版(版所収)

中国的要素と日本的要素が バランスが取れている



日本的要素が膨らんでいる

中国的要素が 膨らんでいる



日本鍼灸各派の楕円構造の概念図。上の中心は中国的要素を表し、下の中心は日本的要素を表す。バランスがよくとれた楕円構造から、どちらかの要素に傾く楕円構造まで、様々である

現形式であり、歴史意識の「古層」の中を蕩々と流れる日本的感性の自己主張なのである。多賀法印流の「邪正一如」の提唱も、この「古層」のいの中の感覚の江戸初期における噴出であった。

江戸期から現代まで、日本鍼灸史上、いつも同じパターン論争が繰り返されてきた。それは、理論と感性、体系と実感、システム構築とそれを崩す力のせめぎ合いである。たいてい論理や体系の側に中国の歴代鍼灸やそれへの共鳴という外来的要素が、直感、実感、実用の側に日本的感性という「古層」的要素が位置する。歴代の日本鍼灸は、常に、中国（朝鮮）の鍼灸思想という先端的な外来要素と土着的な「古層」の日本的要素の両側面の緊張関係のもとに形成されてきた。

中国鍼灸を考える場合は、天人合一観や陰陽五行論など中国伝統思想という一つの中心を持つ円を想定すればよいだろう。一方、日本鍼灸の場合は、円ではなく、中心が二つある楕円の比喩がより当てはまる。二つの中心とは、いうまでもなく、中国（朝鮮）的要素と日本的要素である。そして、この楕円は整った形をしているわけではなく、流派によって、時代によって、二つの中心が占める領域は、どちらかがより大きいのである。更に言えば、現存の日本伝統鍼灸各派が自身の、あるいは他流派のシンブルな理論構成に不満で、それを改良しシステム性を高めようとする場合、必ず、直感、実用、感性の日本の軸から、論理、図式、複雑化の中国的軸へと向かう。それは、曲直瀬道三から現代の経絡治療各派の試みや中医学派まで変わらぬ構造であり、そのような理論構築の方法もまた、日本鍼灸の伝統なのである。

現代中医鍼灸流派の分類

さて、ここで話題を転換し、現代流派について考えてみよう。鍼灸流派の研究は、中国でも行われ